

2011年8月15日

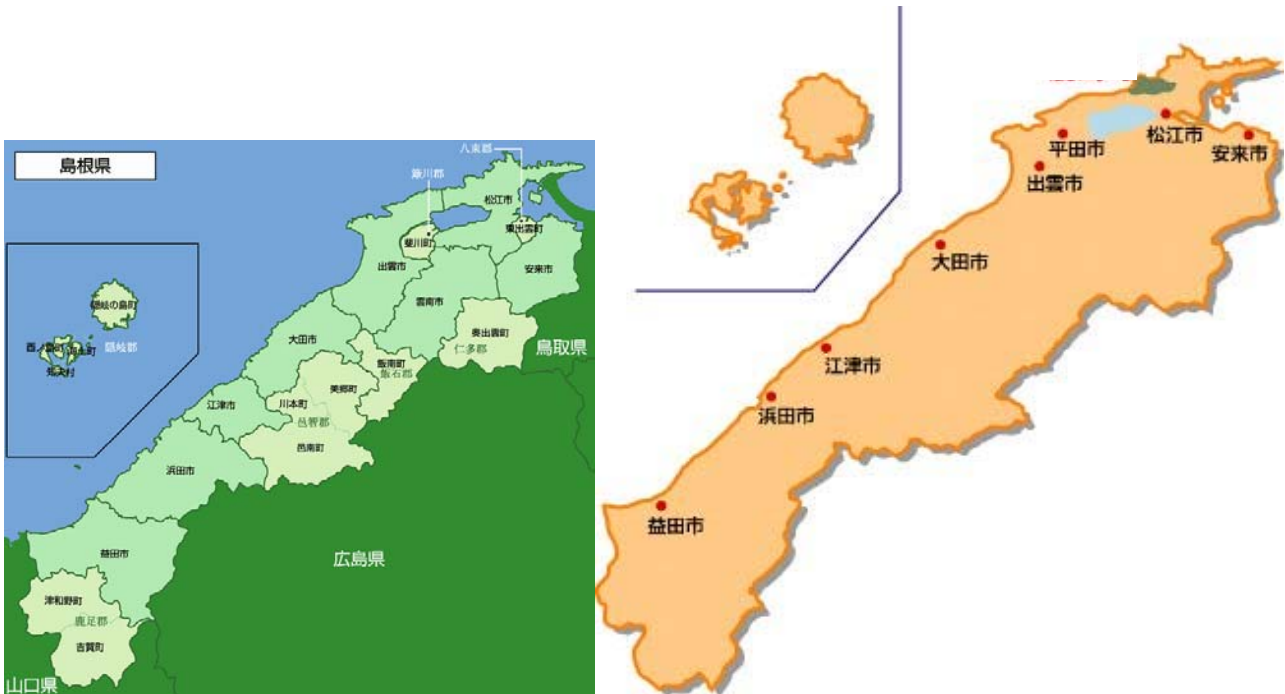
「石州瓦現地視察」に関する報告書

(株)イエサブ ユナイテッド一級建築士事務所
代表取締役 荘司 和樹

〇8月8日は屋根の日

はじめての島根

2011年8月8日(月)、はじめて島根県を訪れました。ここで島根県を簡単に紹介しておきましょう。島根県は、東に鳥取県、西に山口県、南に広島県と隣接し、東西に細長い地形です。下図にあるように、東部は、出雲大社のある出雲市や、県庁所在地の松江市などの出雲地区、西部を石見(いわみ)地区といい、石州(せきしゅう)と呼ばれます。



8月8日は、屋根の日。理由は、八月八日を縦書きにすると、「八」が2階建て住宅の屋根のように見えることと、1988年8月8日に、池袋(東京)にて「588年瓦伝来という史実」にもとづき、「瓦伝来1400年、全国大会」が開催されたので、以降、「8月8日は屋根の日」と位置付けられているそうです。この屋根の日を記念するイベントでの講演依頼を石州瓦工業組合様より頂きました。演題は、「信頼される建築士」。東京で事務所を構える若手建築士が、建築業界や社会の現状に何を感じ、何を考え、そして、何をめざしてきたかについて赤裸々(せきらら)にお話しさせて頂きました。先月末に竣工した大原の家の屋根には、石州瓦を採用しておりますので、その採用経緯や、実際に使用した感想もお伝えしました。

キーワードは、「設計事務所の差別化」。その手法として、弊社では、現代和風デザインに積極的に取り組んでいます。その実例(大原の家など)をご紹介します。

<http://blog.livedoor.jp/ura410/archives/52861473.html>



大原の家 2011年7月25日竣工(千葉県いすみ市) 設計/(株)イエサブ ユナイテッド一級建築士事務所

石州瓦工場と赤瓦のまち並み視察

株式会社セラミカさんの第五工場を見学させて頂きました。原料となる粘土投入→プレス成型で瓦型に→乾燥→施釉（釉薬の塗布）→高温焼成（瓦づくりの中でも最も高い1200度）→製品検査→出荷という工程です。



上の写真左は、最終の製品検査をしている様子。目視で、割れ、歪み、色むら等のある瓦を取り除き、その後、さらに、コンピューターと連動したセンサーを通してチェックし、軽微な歪みのある瓦も取り除いていく。石州の瓦職人達は、瓦づくりに強い誇りを持っていて、丁寧かつ繊細に瓦制作に取り組まれる姿には、感動させられます。工場内は、綺麗に整理整頓されており、皆さん、黙々と真剣な眼差しで瓦づくりに励んでおられました。地場産業の振興の象徴として、県をあげて石州瓦の普及促進に取り組まれていることにも納得がいきます。島根県においては、石州瓦の使用は助成金対象になっており、島根県内での増改築改修工事の際に、石州瓦を使用すると最大10万円が助成されます。その他、地域によっては、更なる助成も用意されています。

<http://www.sekisyu-kawara.jp/10manen/index.html>

市民と、行政と、地場産業とが連携しながら地域振興に取り組まれています。石州瓦は、その象徴でもあります。

瓦工場の見学は、大変勉強になりますのでお薦めします。私自身、今後、石州瓦の採用に悩まれる建て主様については、石州の瓦工場までお連れして、品質の素晴らしさに直接触れて頂こうと思いましたが、百聞は一見にしかず。このレポートを読まれている皆さんの中でも、工場見学を希望されたい方がいれば、是非、石州瓦工業組合さん（0855-52-5605）へご連絡下さい。親切に対応して頂けますし、工場近くには、石見銀山を支えた大森地区の赤瓦の町並み（重要伝統的建造物群保存地区）もあり、また、温泉街も多いので、町並み観光とをセットにした見学が可能です。株式会社セラミカさんでも、瓦見学観光コースを用意されていました。



上の画像は、重要伝統的建造物群保存地区のまち並みです。まち並みに沿って、小川が流れます。島根のまち並みには、至るところで川のせせらぎとまち並みとが結びつきながら線状に伸びており、清々しい風情をかもし出しています。この後、訪れた松江や、倉吉も同様で、まさに、水の都です。



上の写真は、温泉津（ゆのつ）にある西楽寺のなまこ壁。創業 200 年の歴史を有する亀谷窯業有限会社さんのタイルを採用しています。このタイルの色合いが驚くほど美しい。亀谷窯業さんは、サビ瓦をはじめ、食器瓦など様々な画期的な取組みに挑戦しながら、技能や文化の継承や、まちづくりを実践されています。

<http://user.iwamicatv.jp/honkimachi/sinbun2.htm>



上の写真左が石州瓦の原点とも言える石見焼きの「はんど」。上の写真中央、右にある登り窯（がま）で焼きます。これまで、いくつかの登り窯を見てきましたが、この窯の大きさには驚きました。一昔前は、この飴（あめ）色の石見焼きが、水がめや、漬物の器として全国で愛用されてきました。石見焼きは、地元で取れる良質の粘土と独特の釉薬（ゆうやく）を施して、1200 度で高温焼成されているため、硬く、耐酸性、耐水性に優れ、塩害や凍害に非常に強いのが特徴です。最近、設計した大原の家に石州瓦を採用した最大の理由も、その塩害性と耐久性にあります。

石州瓦は、奥が深い。その品質は、化学的根拠に基づいており、古民家の中には、200 年以上もっている石州瓦屋根もあります。石州瓦は、私が責任をもってお薦めできる屋根材です。

※石州瓦の性能や品質根拠、施工方法などについては、石州瓦工業組合さん（0855-52-5605）にご連絡下さい。丁寧に解説して頂けますし、施工については、瓦工事業者を紹介して頂くことも可能です。その場合、安心して瓦工事を任せられます。大原の家でも、石州瓦工事一式は、材工共に分離発注としました。安心して分離発注を実施できたのも、石州瓦工業組合さんのおかげです。特定の一社でなく、複数者による組合という体制が、建て主様からの信頼を得られやすかったからです。



この日は、温泉津（ゆのつ）に一泊しました。温泉津は温泉街として有名で、上の写真は、宿（あさぎ屋）からの風景です。上の写真右は、温泉津のまち並みです。情緒あふれる景色がつづくため、散策しているだけでワクワクさせられます。最近の観光地は、すぐに東京化されてしまっていますが、ここは、良くも悪くもありのまま姿で残っており、一昔前にタイムスリップしたかのように錯覚します。

〇8月9日

石州瓦の可能性



翌日は、温泉津から益田へ移動し、内藤廣（ひろし）さんが設計した島根県芸術文化センター「グラントワ」を見学しました。この施設は、劇場と美術館を併設する文化施設で、中庭を中心に構成されており、屋根や外壁に石州瓦が採用されています。瓦一枚の形状や、色合いに変化をもたせることで、太陽光のあたり方によって、川面のせせらぎのように、多様にうつろう表情を見せます。この表情は、石州瓦デザインの特徴でもあります。

話は変わりますが、温泉津から益田へは電車で移動したのですが、車窓からの風景が絶景でした。日本古来の情景とでもいいでしょうか、日本海沿いのなんとも言えないノスタルジーな世界が続きます。この車窓からの風景を楽しむだけでも十分に癒されます。



グラントワで採用している瓦のサンプルも拝見させて頂きました。



上の写真右は、グラントワから見える周辺の風景。ここにも原風景的な川面のせせらぎが赤瓦と呼応するかのようゆるやかに流れます。



益田から一転し、東の出雲へ移動。廃駅となった出雲大社駅を見学しました。この黒瓦も、鉄砂（てっさ）瓦という石州瓦の一種です。



そして、いよいよ出雲大社へ、あいにく御本殿は、60年ぶりの御修造となる『平成の大遷宮』のため、写真撮影は出来ませんでした。御本殿の修復工事現場を見学させて頂きました。上の写真中央は、浄の池。清々しいマイナスイオンにつつまれたパワースポットです。上の写真右は、歌手の竹内まりやさんの実家である竹野屋。出雲大社の目の前にあります。この旅館の瓦は、株式会社シバオさんのべっぴん瓦が採用されています。

<http://www.shibao.co.jp/>

シバオさんは、九州に縁があり、九州方面の営業にも尽力されています。

8月10日（最終日）

神の国巡りと、白いせせらぎと赤い息吹



8月9日は、松江に一泊し、その翌日の10日（最終日）は、はじめに国宝の神魂（かもす）神社を訪れました。出雲大社同様の大社造りです。緑の香りが清々しく、蝉しづめがこだまする気持ちのよい神社でした。



松江から倉吉に移動し、そこからバスで、いよいよ念願の三徳山三仏寺（みとくさんさんぶつじ）投入堂（なげいれどう）へ。上の写真が投入堂です。垂直に切り立った絶壁の窪みに建てられた他に類を見ない建築物で、国宝に指定されています。この堂を見るために、200mほど山をよじ登ります。この登山道が想像を絶する険しさで、最近も滑落による死亡事故が発生しました。あまりの険しさと危険さに、登山中、何度もあきらめかけました。



投入堂でハトハトになった後、倉吉へ戻り、石州瓦が使用されている「白壁土蔵郡」を見学。玉川沿いに並ぶ白壁土蔵群は江戸、明治期に建てられた建物が多く、今でも当時の面影を見ることができます。玉川に架けられた石橋（上の写真右）や、赤瓦に白い漆喰壁の落ちついた風情のある街並みが続き、重要伝統的建造物群保存地区に指定されています。石州の赤瓦に白い漆喰壁、そして下見板張りという三層構成が、ファサードデザインの基調となっています。今回の視察中、至るところでこの三層デザインに出会いました。白漆喰壁が軽やかに浮き上がって見えますし、その白が連続していく様が街並みに軽快さと秩序と風情（ふぜい）を与えています。まさに、壁面を流れる川面のように、その白の流れをまだらな赤瓦達が、際立たせています。そこには、川岸に沿う緑のような生命力を感じさせます。無機質ないびし銀瓦には、このような生命力がありません。窓などの開口部は、川面に浮かぶ飛び石のようです。

最下層部を下見板張りにすることで、白壁よりも簡単に解体・補修できるため、外壁の汚れやメンテナンス、そして、設備機器の更新・交換などを容易にしており、デザイン的にも、機能的にも理にかなっています。

川の流れと、壁面の白の流れ、これに路上の人の流れが折り重なることで、周辺の空気や、香り、音と相まって、特有のまち並み文化がゆうつと形成され、万人の心を魅了し、そして一つにまとめていたように思います。



上の写真左は、石州赤瓦と格子戸のデザイン。個人的に、写真向かって左下部分の束によって地面から浮き上がらせたデザインが好きです。格子戸がもたらす奥行き感と、石州瓦の鉛色がよく調和し、奥ゆかしさを引き立たせていました。これも現地で実物を見て欲しいです。上の写真右は、まち並みに同化したタウンハウス型のアパート。可愛かったです。

※この白壁土蔵郡を楽しむ場合は、最初に、街並みの中心にある倉吉観光案内所を尋ねてください。ここで荷物も預けられます。また、ここに豊田家住宅という町屋がありますが、これは必見です。これまで数多くの町屋を訪れてきましたが、その中でもベスト3に入るぐらいの気持ち良さやカッコ良さや可愛らしさを兼ね備えておりました。

今回の視察で、断片的ながら石州瓦によるまち並みの魅力の一部に直接触れられたように感じました。やはり、実際に現地を訪れ、見学してみないと分かりません。写真で想像していたデザインや雰囲気と大きく異なることに驚かされました。このまち並みは、生きているというか、刻一刻と表情が変化していきます。ゆるやかな清流の水面のように。そして、その風景は、何より優しい。それが色合いなのか、形なのか、構成や雰囲気なのか分かりませんが、この微妙な生命力を感じさせる優しさが愛おしいのです。今後は、この赤瓦が持つポテンシャルを最大限に引き出しながら、現代和風デザインを追及していきたいと心から思いました。

PS

今回の赤瓦のまち並みを視察したり、車窓から見る日本海の風景を眺めていて、いつの間にか頭の中で、美空ひばりさんの名曲「川の流れのように」が流れ出しました。この歌は、まさに石州赤瓦の歌だと思いました。
※この曲は、最近AKB48をヒットさせた秋元康さんが作詞されています。調べていて気づきました。

川の流れのように

作詞／秋元 康 作曲／見岳 章

知らず知らず 歩いてきた
細く長い この道
振り返れば 遥か遠く
故郷（ふるさと）が見える
でこぼこ道や 曲がりくねった道
地図さえない それもまた人生

ああ 川の流れのように ゆるやかに
いくつも 時代は過ぎて

ああ 川の流れのように とめどなく
空が黄昏（たそがれ）に 染まるだけ

生きることは 旅すること
終わりのない この道
愛する人 そばに連れて
夢 探しながら
雨に降られて めかるんだ道でも
いつかは また 晴れる日が来るから

ああ 川の流れのように おだやかに
この身を まかせていたい

ああ 川の流れのように 移り行く
季節 雪どけを待ちながら

ああ 川の流れのように おだやかに
この身を まかせていたい

ああ 川の流れのように いつまでも
青いせせらぎを 聞きながら